

第 1 回「日本語大賞」

テーマ 「人と人をつなぐ日本語」

大 学 生 ・ 専 門 学 校 生 ・ 一 般 の 部 優 秀 賞 受 賞 作 品

「まあるい言葉の響きに」

群馬県

頼 富 雅 博

ものの形に三角や四角があるように人の発する言葉にも各々に異なった形がある。そのことを初めて意識したのは三十年近くも前の京都での学生生活の中だった。

当時の私は四国の片田舎から出てきたばかりの貧乏学生。初めての都会での生活は驚きととまどいの連続だった。お世話になった学生下宿は江戸時代から続く古い町家で、八十を過ぎたおばあちゃんが一人で切り盛りしていた。その下宿には内風呂がなく、自然に近くの銭湯へ通うのが日課となった。その頃の私は昼間大学に通い、夜は運送会社で働く勤労学生だったこともあり、銭湯通いは朝が専らだった。下駄ばきにタオルと石鹸を入れた桶を持って毎日通った。

湯船にゆつたりとつかり、身も心も洗われた身体に朝風が心地良かった。そんな私を毎朝迎えてくれたのが大家のおばあちゃんの言葉だった。銭湯帰り、下宿が近づくときパシャッ、パシャッと道に水を打つ軽快な音が響いてくる。やがて、その音の主であるおばあちゃんは私の姿を見つけるときまって「まあ、ほっこりしてきやはったなあ」と声をかけてくれる。

その優しい言葉が私の心に「まあるく」響いた。「まあ」も「ほっこり」も「なあ」も全てがおばあちゃんの笑顔と同様でまあるく聞こえた。その一言は田舎から出てきたばかりで不安を抱えた私の心にそつとろうそくを灯してくれるような安らぎを与えてくれるものだった。

「まあ、ほっこりしてきやはったなあ」

おばあちゃんのまあるい言葉が四年間の大学生活の支えとなり、いつの間にか私の心を平和にしてくれるお守りのような存在ともなった。卒業後ほどなくして、おばあちゃんは天上の人となったが、四年間私にかけ続けてくれたその一言は色あせることもなく、まあるい響きと共に今も私の心の中で生きている。今振り返れば、私に世の中に「まあるい」言葉があることを教えてくれた最初の教師はおばあちゃんだった。

やがて社会人となり、気忙しい日常の中で特段に言葉に関心を抱かぬまま数年の歳月が流れた。そんな私に再び「まあるい」言葉の持つすばらしさを感じさせてくれたのは、転勤先で聞いた一つの長崎弁だった。

「よか、よか」

シンプルとしか言いようのないこの言葉。長崎では日常語として生活のあらゆるシーンで聞くことのできるふだん着の方言である。

それでいて、「よか、よか」は不思議な言葉でもある。その最大の理由は用途の幅広さだ。相手に対する諾否に用いられる時には同じ「よか、よか」でも表情や声色を変えるだけで「イエス」にも「ノー」にも使える。それ以外でも賞讃や新鮮な驚きを伝える言葉としても長崎の人には重宝されている。

そうした中で、「よか、よか」が私の心を捉えたのは赦しの意味でも用いられている点だった。例えば、けんかをした相手がわびてくれば「よか、よか」と赦す。また、失敗をした部下が落ち込んでいると、上司が「よか、よか」の一言で全てを受け入れ、水に流す。

この言葉は簡潔な響きの中に人として大切な他者への赦し、慰め、励ましといった心を併せ持っている。それは原爆投下という惨禍にもめげず、みんなで慰め、励まし合いながら生きてきた長崎の人々の優しさがそのまま凝縮された言葉のようにも思えた。坂道で転んで泣いている幼な子を若いお母さんが膝に乗せ、「泣かんでよか、よか」と語りかけている場に遭遇したことがあったが、何故かその母子の姿が聖母子像のように見えた。恐らくは「よか、よか」の言葉に蔵される「まあいい」心と母子の絆が重なり合ったからこそ、そう見えたのではとも思っている。

この「よか、よか」に出会った時に私はなぜか学生時代におばあちゃんから与えられた「まあ、ほっこりしてきやはったなあ」を思い出していた。京都弁に長崎弁。イントネーションも長さも違う二つの言葉が私には同じものに思えてならなかった。

その理由は唯一つ。まあいい言葉だからである。相手を優しくいたわりの心で包みこむ寛容さが両者をまあいい言葉にしているのである。たった一言が人と人をつなぎ、互いの心をもまあいいものにしてくれる。「よか、よか」も「ほっこりしてきやはったなあ」もそうした意味で同根の同じ香りを放つ言葉だということをしみじみ思った。

最初のおばあちゃんとの出会い。そして、長崎での「よか、よか」との邂逅。そのいずれもが形には表すことのできない大切なものを与えてくれた。それがたった一言であつても、まあいい響きが話し手の優しい心を乗せて、相手の心の中にまあいい波紋を広げてくれる。この波紋と我々が日常動揺や混乱の意味で用いるそれとの違いは後者が人と人との絆を断ち切るのに対し、まあいい波紋の方は言葉によってそれまで離れていた人の心をつなぎ、新たな絆を橋のように架ける役割を果たしてくれる点にある。

今の世の中を見ているとどうもとんがった言葉が幅をきかせているように思える。競争社会、選別主義のうねりの中で人の言葉も徐々に荊冠のようなとげとげしさをややもすると帯びてはいないだろうか。

「勝ち組」と「負け組」。「正規」と「非正規」。いとも簡単に人というものを選別してしまう社会となっている。本来、人が平等であるように人の話す言葉も人を平等につなぎ合わせるものであるはずだ。しかし、実際はどうだろう。余裕のない競争社会の中で人は知らず知らず自身の言葉から丸さを失い、いつの間にやらとんがった言葉を発するようになっていないだろうか。

そうした言葉に見え隠れするものは、敵意であったり、偏見や軽蔑である。そして、受け手であるべき人は冷酷にとんがった言葉に返す言葉を失い、深く傷ついていく。

おばあちゃんの言葉にも長崎の町で出会った「よか、よか」にも共通して流れていたのは心の底からあふれ出る優しさである。「あなたのことが大切なんです」、「本心からこの言葉をあなたに伝えたい」、そうした思いこそがまあるい言葉となって相手の心へと旅立っていく。今の時代がとんがっている分だけ、「まあるい」言葉のありがたみが身に沁みて感じられるのだ。

これからの人生でもできることならば出会う人々に「まあるい」言葉で接することのできる人間でありたい。その思いの源流にはおばあちゃんの姿と「よか、よか」がある。